

東京の若者文化と日本社会と経済における影響

ヴィエル アンカ

はじめに

筆者の研究テーマは東京の若者文化が社会、政治及び経済に与える影響である。筆者は学士論文で若者言葉と一般的な日本語の違い、その文化的・社会的な背景を調査した。修士論文では日本の若者の文化的側面が日本の生活一般に与える影響を取り扱った。

修士論文を執筆するにあたり、若者に関する日本内外の文献や記事にあたったが、その意見は実にさまざまであった。たとえばある文献によれば現代の社会問題は特に若者に原因があるのではなく、国の現代化に起因しており、他の文献によれば、社会問題は若者によって創出されているとのことであった。

日本の著しい変化に呼応するように、若者と若者に特有の生活と関係性が指摘されてきた。フリーターや「オタク」と称される若者は増加していると言われ、他方では高齢社会を迎えた中で、どこまで若者の文化は社会に影響を与えるのか、というのが筆者の関心である。日々の生活の質は向上し、西洋の文化の影響を受けて伝統的な思考方法や手段への関心が弱まる中で、多様な情報に容易にアクセスでき、変化を求めている若者の間には文化的変化が浸透している。

誰もが様々な情報にアクセスすることができる時代に生まれた現代の若者は、他者に仕えることを好まず、より自分を中心に置きたいと考えているのではないだろうか。また、世代間格差の拡大が指摘されるなかで、これが若者のサブカルチャーのみならず、日本社会の動向にも大きな影響を与えていると考えられる(Yoder, 2011)。

現代日本社会の課題

現代日本の最大の問題は少子高齢化であると言え、人口動態や経済発展、日々の生活にまで影響が及んでいる。Pradyumna (2005)によると出生率の低下と高齢化は第二次世界大戦の前から始まっており、それが深刻なレベルにまで達してしまったという。明治時代から日本では子どもが増加し、1870年は28.1%、1930年には36.6%となり、ピークにとどいた。その理由の一つは戦後日本の経済発展にあり、財政安定のため大家族が好まれたという。それから少しずつ減少し、1950年に35.4%、その後さらに減少して、1980年は23.5%、2000年には14.7%にまで落ち込んだ。

さらに出生率は1947年に4.5であったのが、1997年には1.5にまで減少した。他方で、平均初婚年齢も25歳から30歳となり、晩婚化が進んだ。その一つの理由は女性も男性も家族をつくる前に自分自身の教育やキャリアを確立したいと考え、余暇な時間も確保したいと願うためと考えられる。夫の家事への無理解や家庭とキャリアを両立できないことを懸念して、女性は特に結婚を避ける傾向にあるという(Pradyumna, 2005)。

BBC ニュース記事で Sarah Buckley は女性の警戒心について指摘している。彼女によれば女性がキャリアを確立したあとで家族をつくりたいと思っても、出世のために一所懸命に勤めているうちに少しずつ自分の生活と家族について時間が少なくなっていく、結局家族をつくることをやめてしまう。(Buckley, 2004)

女性の労働力を活用しようと、1994年に政府が「エンジェルプラン」を打ち出した。その趣旨はキャリアと家庭の両立で、保育サービスの拡充に予算がすぎ込まれた。しかし、その後も1998年の調査によると女性は子どもを産みながら、仕事の拘束時間が長いために復職後は職責を全うできないと考えられた女性はパート労働者となる傾向が見られた(Pradyumna, 2005)。

また、1986年に男女雇用機会均等法が施行されたものの、実際には同等の教育と職歴を持つ男女の給与を比較すると、女性は男性の60-70%に留まっている。The Economist の記事は、政府の様々な施策を講じるも、実際男女の機会は平等でないと指摘する。記事に登場する東京大学を卒業したある女性は、大企業で仕事を始めるも、今はキャリアを重視しているが、将来は家族をつくるために仕事を止めなければいけないのではと自身の将来を心配している。キャリアのために家族を諦める、逆に家族のためにキャリアを諦める彼女のような女性は多いと考えられ、双方が日本の人口動態と経済に影響を及ぼしている(The Economist, 2014)。

定年退職・引退に伴う労働人口の減少も問題となっており、諸外国の若者は遠い未来の話と考えているかもしれないが、日本の若者は年金受給について非常に強く心配している。年金受給開始年齢の65歳に引きあげといった対策はとられているが、年金受給者と現役加入者のアンバランスを解消するには至っていない。

教育制度についても、日本の子どもたちは進学試験に備えて定期試験で良い成績を上げようと、常にプレッシャーを感じているように思われる。倍率の高い有名大学に進学するためには優秀な学業成績に加えて、高い学費や受給が困難な奨学金など、教育制度が本人にも家族にもストレスを与えている(Kodansha International, 1999)。東京大学を筆頭に東京には有名大学が多く、東京在住者は特にプレッシャーを感じているように思われる。東京には進学塾や予備校も多いため、学生は放課後も勉強し、朝から夜まで勉強をして、十分な余暇時間を持たずにいる。

あまりに高い家族と社会の期待に反発するように、日本の若者は社会のルールに反抗的な態度をとるようになるのではないだろうか。近年、これまでの一般的なキャリアとは異なるような新しい働き方が増えている。フリーターや派遣労働者は自分自身の生活のために必要最低限の給与を得ているかもしれないが、正規雇用と比べれば十分でなく、こういった就業形態が増えることは望ましくないと考えられている。

両親の家で住んでいる独身者・パラサイトシングル (Eng. *Parasite single*) は、仕事をして収入を家計の足しにせず自分の趣味のために使い、彼らの多くは30歳以上であるという(Kamaii, 2000)。両親と暮らす若者の数は増加しており、その理由のひとつには、高

額な生活費がある。職に就いても一人暮らしの場合は趣味のために使う金銭的余裕が持てないが、実家で暮らせば多少の貯金も可能となる。

加藤によれば、1989年に日本の過半数は中流意識をもっており、中流社会は人口の90%を占め、中流以上の暮らしが可能な収入があっても、目立たないように周囲と同じようなものを購入したという(Powers, Katō, 1989)。しかしバブル経済がはじけた1990年代以降、就職市場は縮小し、階級の区別が明らかになった。社会の中の均質性のアイディアが力を失うようになり、若者は自分のためにより良い生活環境を確保することに重きを置くようになった。西洋諸国では良い生活とはキャリアと収入、家庭に関するものかもしれないが、日本の若者はそれらに「自由」を加える。社会が若者の状況にもっと目を向けるようになったとしても、厳しいルールは未だ存在し、様々な問題の元凶が若者にあると批判される。社会を前に動かすためには国民、特に若い世代の協力を得ることが必要不可欠であると気付けば、若者を日本の成長に組み込むことができるのではないだろうか。

社会変化の中心は東京とそこに住む若者たちであり、地方に住んでいる人々がより伝統を重んじるとしたら、首都に住む人々は変更に向かっており、それ故に若者文化に関する調査の多くは東京で行われると思われる。日本全国で変化は起こっているが、若者文化の中心は東京であり、社会変革の中心も東京であると考ええる。

インタビュー調査と「若者文化」

筆者は修士論文執筆に際して、ルーマニアに留学していた日本人学生を中心とした若者にインタビューと調査を行い、その中で東京出身者は社会と社会の中の自分の役割について近代的な考え方を持っていることを見出した。

20歳から22歳までの日本人留学生7名（男性1名、女性6名）にインタビューしたほか、日本に住んでいる18歳から32歳までの4名（男性3名、女性1名）にも調査票をおくり、回答を得た。参加者11人のうち、7人が東京に住んでいるか東京出身であった。

インタビュー調査と研究の目的は日本の若者の期待や希望や夢などについて理解を深めることであった。たとえば日本の若者は一般に、教育期間を終了後、良い仕事を見つけ、結婚をして子供をつくり、「立派な大人」になることが期待されている。社会からこのプレッシャーを感じるか、具体的には家族や教師、上司に何か言われるか、家族に教育と仕事についての話をよくするか、余暇時間より勉強が大切か、プレッシャーを感じるか、といった質問をしたところ、多くが「確かにそう感じる」と答えたが、東京に住んでいる人の方が強い圧迫感を持っていた。また、彼らは社会からの期待に肯定的でなかった。彼らは東京の生活は慌しく、身の回りにエンターテイメントが多いのに学生も若い社会人も自分自身の時間を持たず、趣味やレジャーのための時間がないと感じていた。他方で、東京では多様な情報にアクセスでき、外国人との出会いといった新しい経験をする機会に恵まれていると答えた。

東京出身者の一人は、秋田の大学に進学することを選んだが、その理由は、寮生活の費用は比較的安価で、関係の良くない家族から離れて生活することができるからであった。

「若者がアニメや漫画やゲームに影響されている」と考えていたが、調査対象者のほとんどがそれらを趣味としていたものの、毎日漫画を読むと答えたのは3名で、自らを「オタク」と称したのは1名のみであった。余暇時間について聞くと、授業やアルバイトの合間に時間はあるが、東京在住者は通勤・通学時間が長く、彼らが望んでいるほど十分な時間はとれないとのことであった。恋人がいると答えた4人の中では、恋人と週何回も会えるのは1人で、その他は時間がないため週一回会える程度という。

調査対象者は高校時代と比べれば、大学生になってから勉強に関するプレッシャーは減少したと答えた。高校時代は大学進学に向けてプレッシャーが強く、専攻分野に関する親との対立を経験したのもあった。調査対象者のうち2人は家族と良好な関係になく、その他は概ね良い関係にあると答えたが、親との対立の理由は教育と就職についてであった。

結婚願望については、1人を除いて必ず結婚したいと答えたが、婚姻年齢は25歳から35歳の間、6人は大学卒業をして就職し仕事、貯金ができた30歳ごろに結婚したいとした。

子どもについては、1人を除いて子どもを持つことを望んでおり、その他の人は2人、3人または4人子どもが欲しいと答えた。東京在住者は2人または3人の子どもが欲しいと答えたが、その理由は子どもとして自身が一人っ子で寂しい経験をしたため子どもには同じ思いをさせたくないか、自身に兄弟があつて自分の子どものために同じ経験をさせたいからであった。

調査対象者の大半は学生であり、まだ将来にどんな職につきたいか明確でなく、今はアルバイトで教師、ウェーター、店員として働いていたが、給与水準や求人状況から、必ず東京で働きたいと考えていた。

日本社会の最近の問題について聞いたところ、少子高齢化を挙げ、自分たちは年金を受け取ることができないのではないかと心配すると同時に、日本政府を信用していないことがわかった。また教育費の高騰についても懸念しており、特に大学の学費は高額なうえ奨学金は少なく、有名大学に入学できたが、より規模が小さくても学費の安い大学を選んだと答えたのもあった。調査体調者の大半は自らの生活に満足していたが、筆者は社会が若者の状況により目を向ければ、生活の質が向上するのではないかと考える。

国際的にも日本文化に関心を持つ人は多く、歴史、侍、芸者、茶の湯といった伝統的な日本のイメージに加え、映画、ドラマ、音楽、アニメ、漫画、コスプレ、ゲームといった現代文化への関心も高まっている。これら現代文化のドアは大きく開かれており、様々な国の人々の興味を集め、日本語や日本学を勉強する学生も増えている。特にアニメと漫画は若者に人気があるが、キャラクターの複雑さやメッセージ性の強さにより、西洋のアニメーションと比較して完成度が高い。アニメや漫画は子どもに限らず若者にファンが多いが、携帯電話等の電子機器と通信技術の発達により、趣味を気軽に毎日のスケジュールに組み込むことができるようになった。オンライン上で漫画とアニメ買う人は増えており、コンベンションに行つてコスプレやロールプレーのような活動を楽しむ者もある。毎年2回東京で開かれるコミケットは、1975年の初回大会の来場者は数百人であったが、現在では50万以上とも言

われる。アニメや漫画やゲームの熱心なファンである「オタク」は、自信の愛好する作品に関する物品を購入し、イベントに参加し、コスプレを楽しんだりする。初期のファンは仮装用の衣装を購入していたが、昨今は髪や衣装を販売する専門店も存在している (O' Malley, 2012)。

コスプレはあるキャラクターを模するのみならず、作品の展開される時代、場所、作品に登場する音楽のジャンルといった背景も取り入れている。コスプレをする若者は渋谷、原宿、秋葉原のといった外国人にも人気の高い観光地に集まることが多いが、様々なコスチュームをまとった「メイド」ウェイトレスのいるカフェは、日本人と外国人観光客の双方を引き寄せている。原宿はコスプレヤが話題となる以前から、若者が思い思いの格好をし、トレンドを生み出してきた街でもある。日焼けサロンなどで肌を焼き、髪を明るく染め、濃い化粧を施した「ガングロ」ファッションなども、東京で生まれて消えていったトレンドのひとつと言えるだろう。

おわりに

以上のような若者が震源地となっている文化は、「問題」と見られることもあるが、日本はこれらを「ポップカルチャー」として広報し、日本人のみならず外国人からも経済的な利益を得ている。原宿のような観光地は「変わった日本」に興味を持つ観光客をマグネットのように引きつけており、インターネットといったメディアの影響もあり、若者文化は若者以外の年齢層にも認知されるようになった。

若者たちの現状は、日本は社会構造や就労制度の再構築を促していると言えるが、近年の改革をもって、日本社会は旧態依然としているように見える。筆者の調査においては、本稿のはじめで触れたように若者は必ずしも前世代の作り上げてきた価値観に賛成していないが、自分の考えを貫くことが自身の生活や将来に悪影響を与えることを懸念し、葛藤しているように思われた。現代の若者は多様な情報にアクセスでき、日本以外の文化や人々の影響を受けやすく、「自分の考え方」を持つようになったため、親や前世代の意見に簡単に賛成できないのではないだろうか。それでも、若者が社会で大切な役目を果たし、前に一歩進むためには、日本は「伝統」に固執してはいけなく考える。「伝統」文化の一部は失われてしまうかもしれないが、明治時代や太平洋戦争後戦後には様々な変化を受け入れたことで現代の日本が出来上がった。当時も変革を伴ったが、女性解放論のような社会的な革命のおかげで、社会は前に進んだのではないだろうか。若者のために変化を起こさなければ、社会の問題は更に深まってしまいうだろう。正念場を迎えている今、日本は何らかの道を見つけ出すと信じたい。

参考文献:

- Kamaii, Yoshihiko. 2000. Freelancers: An increasing social phenomenon. *Social Science Japan* 18
- Kodansha International. 1999. *Japan: Profile of a Nation*. Kodansha International
- Powers, Richard Gid. Kato, Hidetoshi. Stronach, Bruce. 1989. *Handbook of Japanese Popular Culture*. Greenwood
- Pradyumna, P. Karan. 2005. *Japan in the 21st Century: Environment, Economy and Society*. Kentucky: The University Press of Kentucky
- Vieru, Anca. 2013. unpublished Masters degree research paper. *Youth culture and its impact on Japanese society*
- Yoder, Robert Stuart. 2011. *Deviance and Inequality in Japan: Japanese Youth and Foreign Migrants*. Bristol: The Policy Press
- Buckley, Sarah. 2004. *Japan's Women Wary to Wed*
<http://www.genderacrossborders.com/2011/01/07/japanese-women-quit-job-after-marriage/>
(25.08.2014, 12:30)
- The Economist. 29.03.2014. *Japanese women and work. Holding back half a nation*.
<http://www.economist.com/news/briefing/21599763-womens-lowly-status-japanese-workplace-has-barely-improved-decades-and-country> (26.08.2014, 11:42)
- O'Malley, Elizabeth. 2012. So you Want to be a Cosplayer?
<http://animecons.com/news/article.shtml/1452%20-%20> (25.08.2014, 11:10)
- <http://www.comiket.co.jp/info-a/WhatIsEng080225.pdf> (24.08.2014, 10:13)